

令和 6 年 6 月 1 日現在

機関番号：34603

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12301

研究課題名（和文）曲亭馬琴の読本・合巻における演劇利用の研究

研究課題名（英文）A study of the use of drama in Kyokutei Bakin's Yomihon and Gokan

研究代表者

中尾 和昇（Kazunori, NAKAO）

奈良大学・文学部・准教授

研究者番号：00743741

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、主として曲亭馬琴の読本・合巻を対象として、演劇作品および演劇的趣向の利用実態に関する研究をおこなった。具体的には、「曲亭馬琴の合巻作品の調査・分析および翻刻紹介」「曲亭馬琴の読本・合巻における演劇作品利用の再検討」「曲亭馬琴の読本・合巻における演劇的趣向の検討」の三点である。これらの研究を通して、馬琴の演劇に対する向き合い方が山東京伝などの周辺作者とは異なること、そしてそれが彼一流の小説観を背景としていることが浮き彫りとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、曲亭馬琴の演劇利用については、読本作品を中心に検討されてきたが、合巻を含む彼の著述全体を見渡した研究はなされてこなかった。本研究によって、馬琴の演劇利用を俯瞰的に捉えることが可能となった。また、京伝に比べて活字化の遅れている馬琴の合巻作品を、リポジトリとして公開している学術雑誌に翻刻・紹介することによって、日本国内はもちろん、海外に向けても発信することができた。これにより、馬琴研究のさらなる進展が期待される。

研究成果の概要（英文）：In this study, I examined and analyzed the actual usage of theatrical works and theatrical ideas, mainly focusing on Kyokutei Bakin's Yomihon and Gokan. In particular, the research was conducted from the perspectives of "researching, analyzing and introducing transcriptions of Bakin's Gokan works," "reexamining the use of theatrical works in Kyokutei Bakin's Yomihon and Gokan works," and "examining the theatrical ideas in Bakin's Yomihon and Gokan works." Through these studies, it has become clear that Bakin's approach to drama differed from that of other writers such as Santo Kyoden, and that this was based on his own unique view of novels.

研究分野：日本近世文学

キーワード：読本 合巻 演劇 趣向 曲亭馬琴 山東京伝 人物造型

1. 研究開始当初の背景

江戸時代を代表する戯作者・曲亭馬琴(1767～1848)は、『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』などの読本、『傾城水滸伝』『新編金瓶梅』などの合巻を数多く著述・刊行し、当時の戯作界に多大なる影響を与えた存在として知られる。馬琴小説研究の方法論としては、典拠論や様式論が主流である一方で、研究者は馬琴の作品内に見られる演劇作品および演劇的趣向の利用に着目した。馬琴小説において、歌舞伎・浄瑠璃などの演劇はハイライトとなるような重要な局面で効果的に発揮され、登場人物の葛藤する心理(=人情)を浮き彫りにしていることなどから、馬琴の小説作法や小説観に深く関わるものであると考えるからである。このような問題意識に立脚し、研究者はこれまでの研究で、馬琴の読本・合巻に見られる演劇の利用実態を分析し、馬琴の小説作法および小説観が変容していく様相を証し得た。しかし、取り上げられなかった演劇が数多く存するため、利用実態のさらなる分析をおこない、その特徴を明らかにしていく。

2. 研究の目的

馬琴小説研究においては、読本に比して、合巻を対象として論じられることが圧倒的に少ない。その背景には、研究の発展に必要な基礎資料が十分に整っていないことが挙げられる。また、読本と合巻が異質な文芸であるとして、意識的に区別されてきたことも要因の一つである。しかし、馬琴は合巻においても読本と変わらぬ執筆姿勢で臨んでおり、読本だけを取り上げて馬琴小説を語るのは問題である。文芸形態は異なれど、時代設定や舞台背景などの面において、両者に共通する部分があるのも事実で、とりわけ、演劇において両者は高い親和性を有することが、研究者のこれまでの研究で明らかになった。つまり、馬琴の著述全般を総体として捉えることが重要なのである。

馬琴は文化期に世話浄瑠璃を主要典拠とする「巷談もの」と呼ばれる読本群を集中的に刊行しており、七五調などの戯曲的文体を多用していることから、演劇に親炙していたことが知られている。しかし、演劇的趣向も含めた比較・検討が充分になされていないために、演劇利用の実態は不明なままである。研究者はこれまで、「身替り」「血合わせ」などの趣向について、その利用実態を明らかにしてきたが、これらの趣向は主題との緊密な連携が図られ、同時に勧善懲悪や因果応報といった馬琴の小説理念とも結び付いていることがわかった。さらなる実態解明には、より多くの作品を俎上に載せて検討する必要がある。

また、馬琴の周辺には山東京伝・式亭三馬・十返舎一九・柳亭種彦などの戯作者がおり、彼らとの関係は看過することができない。とりわけ山東京伝は師匠格にあたり、読本執筆においては相互に型の工夫を積み重ねていったことから、重点的に比較・検討する必要がある。演劇利用は馬琴に限らず、他作者の作品にも見られるため、利用態度の共通点・相違点を分析することで、馬琴小説の独自性を浮き彫りにすることが可能となる。

よって本研究では、曲亭馬琴の読本・合巻に見られる演劇の利用実態を分析し、山東京伝の作品との比較をおこなうことで、馬琴の小説作法を多角的・多面的に捉え、その独自性を浮かび上がらせることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、前述の目的を達成すべく、(1)「曲亭馬琴の合巻作品の調査・分析および翻刻紹介」(2)「曲亭馬琴の読本・合巻における演劇作品利用の再検討」(3)「曲亭馬琴の読本・合巻における演劇的趣向の検討」の三点を重点課題として設定し、研究を進めることとした。

(1) 曲亭馬琴の合巻作品の調査・分析および翻刻紹介

馬琴合巻は未紹介の作品が多く、研究の発展に必要な基礎資料が整っていないのが現状であるため、活字テキストの充実を図るべく、各地に所蔵されている作品の諸本調査を実施し、各年度ごとに翻刻紹介をおこなう。

(2) 曲亭馬琴の読本・合巻における演劇作品利用の再検討

読本・合巻作品で利用される演劇作品(おもに世話浄瑠璃)に関して、作品構成や主題、人物造型に焦点を絞って検証する。また、山東京伝の読本・合巻作品と比較することで、馬琴の独自性を浮かび上がらせる。

(3) 曲亭馬琴の読本・合巻における演劇的趣向の検討

読本・合巻で馬琴が利用する演劇的趣向に関して、これまでの研究手法・成果を援用しつつ、その利用実態を解明する。そのうえで、演劇的趣向が作品にもたらす影響を多角的・多面的に捉えることを目指す。

4. 研究成果

(1) 曲亭馬琴の合巻作品の調査・分析および翻刻紹介

曲亭馬琴の合巻作品の調査を、国立国会図書館・東京都立中央図書館・立命館大学アトリサーチセンター・蓬左文庫・関西大学図書館・専修大学図書館にておこなった。このうち、国立国会図書館・東京都立中央図書館・蓬左文庫では、基礎的な書誌調査をすべて終えることができた。当初は、このほかの所蔵機関（慶応義塾大学図書館・名古屋市鶴舞中央図書館など）での調査も予定していたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大にともない、各所蔵機関での調査が制限されたため、断念せざるを得なかった。

以上の調査を踏まえたうえで、馬琴合巻『敵討身代利名号』（文化5年〔1808〕刊）『千葉館世継雑談』（同9年〔1812〕刊）『安達原秋二色樹』（文政3年〔1820〕刊）について、翻刻紹介をおこなった。とくに『敵討身代利名号』『安達原秋二色樹』の二作品は、「身替り」「血合わせ」といった演劇的趣向が用いられており、(3)の研究と連動する形で進めることができた。

(2) 曲亭馬琴の読本・合巻における演劇作品利用の再検討

本研究では、『恋娘昔八丈』（安永4年〔1775〕初演）『糸桜本町育』（同6年〔1777〕初演）『播州皿屋舗』（寛保元年〔1741〕初演）という三作の浄瑠璃作品と比較した研究をおこなった。

『恋娘昔八丈』については、馬琴合巻『敵討賽八丈』（文化6年〔1809〕刊）京伝合巻『今昔八丈揃』（同9年〔1812〕刊）馬琴読本『美濃旧衣八丈綺談』（同11年〔1814〕刊）の三作品について、人物造型の観点から論じた。その結果、悪臣秋月一角の役割の拡大・縮小、新たな悪女（岩波・斧）の創出、喜蔵の善悪、お駒の不道德の容認・否認という点から、演劇作品に向き合う姿勢に大きな違いが見られた。

『糸桜本町育』については、京伝合巻『糸桜本朝文粹』（文化7年〔1810〕刊）馬琴読本『糸桜春蝶奇縁』（同9年〔1812〕刊）に加え、十返舎一九の合巻『東男連理緒』（同6年〔1809〕刊）を取り上げ、作中人物の評価の観点から論じた。その結果、綱五郎はいずれの作品においても評価が高い一方で、花咲・お房・左七・小糸の四人については、作品によって評価が分かれる傾向にあることがわかった。とくに花咲・お房・左七・小糸の評価の違いからは、馬琴が独自の人物造型を志向していたことが窺えた。

『播州皿屋舗』については、京伝合巻『播州皿屋敷物語』（文化8年〔1811〕刊）『十人揃皿屋敷』（同9年〔1812〕刊）馬琴合巻『皿屋敷浮名染著』（同11年〔1814〕刊）を取り上げ、悪臣青山鉄山の人物造型を中心に論じた。『播州皿屋敷物語』は、浄瑠璃を主要典拠としつつ、『彩入御伽草』『花系図都鑑』『阿漕浦三巴』などの諸文献をもとに、二人の敵役（青山鉄山・弥太七）を改変することで、物語に大きな変化を加えている。『十人揃皿屋敷之訳続』は、女順礼の怨霊の発生・消滅が全編を統括する枠組とすることによって、自ら設定した枠組を基に、いくつかの作品から抽出した皿屋敷ものの要素を肉付けして物語を構成している。これは、馬琴読本『盆石皿山記』（文化3、4年〔1806・07〕刊）に倣ったものと思われる。

『皿屋敷浮名染著』も同様の方法を採用するが、因果の理を強調する点において異なる。また、皿屋敷ものの利用について言えば、特定の作品に依拠するのではなく、諸要素を抽出して落とし込む方法を採用している。

(3) 曲亭馬琴の読本・合巻における演劇的趣向の検討

本研究では、演劇的趣向である「証拠の品を介した離別・邂逅」「身替り」「血合わせ」について考察した。当初は「妙薬となる生血」「奇跡的な力を発揮する宝物」「人体に影響を及ぼす怨霊」という三点についての考察を予定していたが、かつて論じた三つの趣向の再検討が必要であると判断したため、「妙薬となる生血」「奇跡的な力を発揮する宝物」「人体に影響を及ぼす怨霊」については見送ることとした。

「証拠の品を介した離別・邂逅」については、京伝合巻『八重霞かしくの仇討』（文化5年〔1808〕刊）と馬琴合巻『十三鐘孝子績』（同6年〔1809〕刊）との比較を通して、馬琴が京伝の方法を意識的に取り入れた可能性を指摘した。とくに、証拠の品である鏡と笄については、類似した挿絵が描かれており、馬琴が京伝合巻の趣向を取り入れたものと考えてよい。また、「証拠の品を介して離別・邂逅」が、両合巻の長編構成を支える趣向であることについても言及した。

「身替り」については、人間の犠牲死を描いたものではなく、神仏靈験譚の性質を持ったものについての検討をおこなった。馬琴は黄表紙『小夜中山宵啼碑』（享和4年〔1804〕刊）を手はじめとして、『石言遺響』『稚枝鳩』（いずれも文化2年〔1805〕刊）といった初期の読本作品において神仏靈験譚としての身替りを多用する。その後、読本における身替りが人間の犠牲死に焦点を当てたものとなっていく一方で、神仏靈験譚としてのそれは、合巻が主戦場となっていった。その後、因果の理を強調する作品づくりを目指したといったこともあり、この趣向は馬琴の著述から姿を消すこととなった。

「血合わせ」については、親子の血が融合する 融合型 と親の髑髏に子の血が吸着する 吸着型 の二種類があることを述べたうえで、馬琴が 融合型 と 吸着型 を使い分けていたこ

とについて、京伝の利用方法と比較しつつ論じた。馬琴は当初、吸着型 が所謂『奥州安達原』 「一つ家の段」に見られる演劇的趣向で、その出所が不明であったことから、そちらを採用せず、融合型 を多用していた。ところが、吸着型 を中国の歴史文献から見出すことに成功して以降は、合巻『安達原秋二色樹』(文政3年[1820]刊)や読本『南総里見八犬伝』で用いるようになった。一方で、京伝は一貫して 吸着型 を用いており、利用態度の違いが浮き彫りになった。

以上、本研究では主として曲亭馬琴と山東京伝の読本・合巻における演劇利用について研究をおこなったが、両者の演劇に対する向き合い方が、より鮮明になったものと思われる。しかし、調査を進めていくにしたがって、周辺作者への目配りが、より重要になってくるとの認識を抱くようになった。戯作者にとって、演劇を取り入れることは、もっとも手軽な方法であった。京伝や馬琴に比べれば安易な作品づくりがなされているが、裏を返せば、そういった作品を追究することによって、当時の戯作界に漂う空気を正しく呼吸することが可能となろう。とくに注目すべきは十返舎一九である。滑稽本『東海道中膝栗毛』の作者として名高い一九であるが、黄表紙・合巻・読本などの分野でも多数の著作をのこしていることが知られる。また、一九の戯作者としての出発点が浄瑠璃作者であったことを考え合わせれば、演劇との関係性は見逃せないところである。今後は一九の著作における演劇利用の実態を明らかにすることで、近世後期における戯作と演劇との関係性について、さらなる研究の進展が望めるであろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 11件）

1. 著者名 中尾和昇	4. 巻 52
2. 論文標題 『安達原秋二色樹』翻刻（下）	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 奈良大学紀要	6. 最初と最後の頁 176-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中尾和昇	4. 巻 29
2. 論文標題 『播州皿屋舗』と短編合巻	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 奈良大学大学院研究年報	6. 最初と最後の頁 134-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中尾和昇	4. 巻 51
2. 論文標題 『安達原秋二色樹』翻刻（上）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 奈良大学紀要	6. 最初と最後の頁 184-169
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中尾和昇	4. 巻 28
2. 論文標題 京伝・馬琴・一九と『糸桜本町育』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 奈良大学大学院研究年報	6. 最初と最後の頁 190-174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中尾和昇	4. 巻 72-1
2. 論文標題 書評 三宅宏幸著『馬琴研究 - 読本の生成と周縁 - 』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本文学	6. 最初と最後の頁 70-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中尾和昇	4. 巻 13
2. 論文標題 「血合わせ」再考 - 京伝・馬琴の諸作品をめぐって -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 読本研究新集	6. 最初と最後の頁 41-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.57268/yomihonshin.13.0_41	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中尾和昇	4. 巻 50
2. 論文標題 『敵討身代利名号』 - 翻刻と解題 - (下)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 奈良大学紀要	6. 最初と最後の頁 180-198
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中尾和昇	4. 巻 69-8
2. 論文標題 京伝・馬琴の演劇利用 - 『恋娘昔八丈』を典拠とする作品をめぐって -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本文学	6. 最初と最後の頁 9-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中尾和昇	4. 巻 49
2. 論文標題 『敵討身代利名号』 - 翻刻と解題 - (上)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 奈良大学紀要	6. 最初と最後の頁 164-149
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中尾和昇	4. 巻 12
2. 論文標題 馬琴小説における「身替り」 - 神仏霊験譚をめぐって -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 読本研究新集	6. 最初と最後の頁 33-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.57268/yomihonshin.12.0_33	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中尾 和昇	4. 巻 48
2. 論文標題 『千葉館世継雑談』 - 翻刻と解題 - (下)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 奈良大学紀要	6. 最初と最後の頁 166-145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中尾 和昇	4. 巻 10
2. 論文標題 京伝・馬琴の合巻制作 - 『八重霞かしくの仇討』と『十三鐘孝子績』 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 読本研究新集	6. 最初と最後の頁 1~15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.57268/yomihonshin.10.0_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中尾 和昇	4. 巻 47
2. 論文標題 『千葉館世継雑談』 - 翻刻と解題 - (上)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 奈良大学紀要	6. 最初と最後の頁 263 ~ 280
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 中尾和昇
2. 発表標題 京伝・馬琴の演劇利用 - 『恋娘昔八丈』をめぐって -
3. 学会等名 日本文学協会第39回研究発表大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 奈良大学、山田 昇平、岸江 信介、中尾 和昇、光石 亜由美、木田 隆文、松本 大	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 100
3. 書名 奈良の文学とことば	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------